

## 袋井東小学校の年表掲載情報に関する考察

A study on the chronology of Fukuroi-Higashi Elementary School

小栗 勝也\*

Katsuya OGURI

## 1. はじめに

袋井東小学校に保管されている『沿革誌』を主な材料として進めてきた筆者の用行義塾関連の調査結果は本誌本巻別掲拙稿で示した通りである。この調査の過程で、後身の小学校に関する情報を目にすることも多かった。それらを見ながら、袋井東小学校が自身のホームページで公表している自校の年表の中に、事実と異なるものや疑問に思われる点があることに気付いた。『沿革誌』以外の文書を調査したことから判明したケースも幾つかある。今後、同校の年表修正作業の機会があった時に役立つであろうと考え、それらをまとめたものが本稿である。但し、これらは用行義塾の調査から生まれた断片的な副産物に過ぎず、後身小学校の歴史上の問題点をすべて解明している訳ではない。将来、どなたかが悉皆調査によって本稿を補完して下さることを願う次第である。

はじめに表 1<sup>(1)</sup>を示す。これは現在、袋井東小学校のホームページに「沿革」として掲載されている年表の情報(2015年2月1日時点)から明治期を中心にピックアップしたものに、筆者が別の情報を付け足したものである。本誌本巻別掲拙稿「用行義塾に関する未公開資料「沿革誌」について(その1)」の中では、これと同じものを表 3として用いている。

表 1で、年月日の左端に「\*」印をつけた行は、袋井東小学校のホームページに記されている情報をそのまま書き写したものである。その量は、明治期だけに限ると、項目として僅かに7つ、行数にして8行(1つの項目だけ2行の記述があるため)でしかない。それ以外の行は、筆者が新たに記した情報である。但し最右列の「学校の所在地・行政区域の変遷」の欄は、左端に「\*」を付した行であっても、すべて筆者が記入したものである。同表を基本情報として、以下、年代順に、年表の内容に関して修正等が必要と思われる事項とその根拠について記す。

## 2. 年表で修正又は考慮を要する箇所

## (2-1) 明治6年久津部学校の対象範囲(学区)について

第1に、明治6年の久津部学校が対象範囲とした地域(今日で言う学区のこと)に関する問題を取り上げたい。『静岡県磐田郡誌・上巻』の記述から、国本村と広岡村が作られたのは明治8年であることが分かった。同書には「広岡村(明治八年改組の際上貫名・下貫名・方丈・<sup>たんどころ</sup>反所・袋井村を合併したるもの)」、「国本村(明治八年改組の際久津部・北原川・不入斗・及び周智郡菅ヶ谷村を合併したるもの)」<sup>(2)</sup>と記されている。『角川日本地名大辞典 22 静岡県』<sup>(3)</sup>でも同様の説明がなされている。

つまり、久津部学校が創設された明治6年には、未だ広岡村も国本村も存在していなかったのである。そのため、明治6年の久津部学校に関してホームページの年表に書かれている「広岡村、国本村の二ヶ村による」という内容は、事実と異なる情報を記していることになる。

なぜ年表に、「広岡村、国本村の二ヶ村による」と記されたのであろうか。想像される典拠は『沿革史 第二編』<sup>(4)</sup>の「第一章」「第一節」に、「用行義塾ヲ廃シ久津部学校ヲ設置シテヨリ明治十二年五月ニ至ルマデハ山名郡国本村同広岡村ノ二ヶ村其設置区域」云々という記述である。これを鵜呑みにしたことによる誤りではないかと推察する。『沿革誌』の執筆者も、明治8年以前と以後では村の名と村の区域が異なることを考慮せずに記述している。しかし、それは誤りである。国本村、広岡村は明治8年に生まれた村なので明治6年の記述には使えない。これまで誰もその事実気付いていなかったことになる。

従って訂正が必要になるが、この部分の年表を直すなら、例えば( )内の言葉を「(後に国本村・広岡村になる地域を対象に)」と書き換えればよいであろう。但しこれは、『沿革誌』の記述が正しいと仮定した場合の話であ

表1 袋井東小学校ホームページの年表と追加情報（明治期中心）

時期(明治期中心に)	学校名等	備考(小栗による)	学校の所在地・行政区域の変遷等(この列は全て小栗が記入)
*明治5年6月25日	私立用行義塾創立(久津部字新屋)		久津部村
*明治6年6月10日	公立久津部学校(広岡村、国本村の二ヶ村による)創立		【左の2つの村は、当時は存在していない】
明治6年(用行義塾廃止後)	「第拾老大区拾壹小区公立小学久津部学校」に【★】		—
明治7年4月	後の国本村、広岡村、高尾村3村の「連合公立学校」に【★】		—
明治8年	—	久津部、北原川、不入斗、周智郡菅ヶ谷が合併して国本村に、また上貫名、下貫名、方丈、反所、袋井村が合併して広岡村に。【角川】	国本村 【前頁右段の本文と注を参照のこと】
明治12年	—	山名郡が発足 【角川】983頁【郡区町村編制法による】	山名郡国本村
(明治12年1月～の資料)	「久津部校」	【本稿「写真3」を参照】	—
(明治12年6月～の資料)	「久津部小学校之印」	【本稿「写真2」を参照】	—
*明治12年9月29日	公立小学刮目舎と改称		—
明治12年9月	公立小学刮目舎	←愛野、広岡、国本の3村連合で設置【*】 ←戸倉新資料でも、当時は3村連合の学校であることが確認できる。【★】	久津部学校を廃して設置
明治12年11月	高尾村が学区から分離、愛野村が入る【★】		—
明治12年12月16日	「公立小学刮目舎」と改称【★】		—
明治13年11月	山名郡国本村設置公立小学刮目舎	←戸倉新資料①に記載の校名【★】	山名郡国本村
明治14年10月4日	【校舎を新築・移転】	←広岡村久津部79番地に【○】	広岡村久津部
明治14年10月20日	【校地変更】 【この移転までは用行義塾創設以来の場所に設置】	←用行義塾創設以来、明治14年10月20日までは、国本村久津部字新屋2080番地の1が校地 ←10月20日から広岡村久津部檜ノ木に校地を変更【◎】	広岡村久津部 【久津部は国本村が広岡村に変わったのか、それとも両村に久津部があったのか、詳細は不明】
明治14年10月20日	【この移転までは用行義塾創設以来の場所に設置】	←今回の新築移転までは「国本村久津部」にあったと記載あり。【○】 ←戸倉新資料①からも、この新築校舎が出来るまでは用行義塾発足時の校舎を使用していたことが分かっている。【★】	【「久津部」は国本村と広岡村の両方に地名として残されたことになる】
明治14年10月20日	【新築校舎の落成式挙行】	【*】	【以降も広岡村】
明治14年 (明治17年の資料)	村立連合小学刮目舎 「村立小学刮目舎」とある	←戸倉新資料②に記載の校名【★】 【△】	—
*明治19年2月1日	尋常小学刮目舎設置(広岡、国本、愛野、豊沢、高尾の5ヶ村)豊沢と高尾に分校をおく		—
明治19年2月	公立小学刮目尋常小学校とする 【上の「尋常小学刮目舎」と校名が違ふ点に注意】	←明治16年に広岡、国本、愛野、豊沢、高尾の5村で1行政区画となり、更に19年2月に1行政区画1学校の制になったため。また、豊沢、高尾に分校を置く。【*】	【この時は5村の合併ではなく、学区のみの変更】
明治19年9月	山名郡第三学区尋常小学刮目舎に改める	上記と同じ5ヶ村を設置区域とし、愛野分校、豊沢分校、高尾に分校「洗心館」を置く【▲】	—
(明治19年の資料)	「村立小学刮目舎」とある		—
*明治22年2月1日	広岡村、国本村、村松村、三ヶ村で久努村となる		久努村
*明治22年11月29日	久努村、刮目尋常小学校を広岡90へ設置		久努村
明治22年	久努村、刮目尋常小学校を改設	←国本、広岡、周智郡村松の3村合併により山名郡久努村になったことを受けて。このとき豊沢、高尾、愛野の旧3村は分離。【*】3つの分校も分離【▲】	山名郡久努村 【村松に村松分校を置くも、1年で廃止】【▲】
明治22年12月20日	静岡県山名郡校札を「久努学区刮目尋常小学校」に改める	【『沿革誌 明治20～24年』明治22年12月20日の条より】	久努村
明治23年2月13日	校印調整、「静岡県山名郡久努学区公立刮目尋常小学校印」	【『沿革誌 明治20～24年』明治23年2月13日の条より】	久努村
明治25年5月1日	久努村立刮目尋常小学校を設置	←明治23年の小学校令と明治25年の県令第一号を受けて。【*】	久努村
*明治26年10月30日	高等科2年設置し久努村立刮目尋常高等小学校と改称		久努村
明治26年11月1日	久努村立刮目高等小学校となる	←高等科の設置が許可されて。【*】	久努村
明治29年	—	久努村が磐田郡に入る【角川】381頁	磐田郡久努村
明治41年3月18日	刮目尋常小学校に	←義務教育延長で高等科廃止による【▲】	
明治42年	刮目尋常高等小学校に	←高等科2年を再び併置したことによる【▲】	
*昭和16年4月1日	久努村立久努国民学校に校名変更		久努村
*昭和22年4月1日	久努村立久努小学校に校名変更、刮目中学校併置		久努村
*昭和24年8月31日	袋井中学校と合併移転	【移転は刮目中学校のみのことであろう】	久努村
*昭和27年10月10日	袋井町立袋井東小学校に校名変更	←【磐田郡久努村と袋井町が合併し新しい袋井町になったため】	袋井町
*昭和33年11月1日	袋井市立袋井東小学校に校名変更	←【袋井町が市になったため】	袋井市



図1 久津部村の位置関係

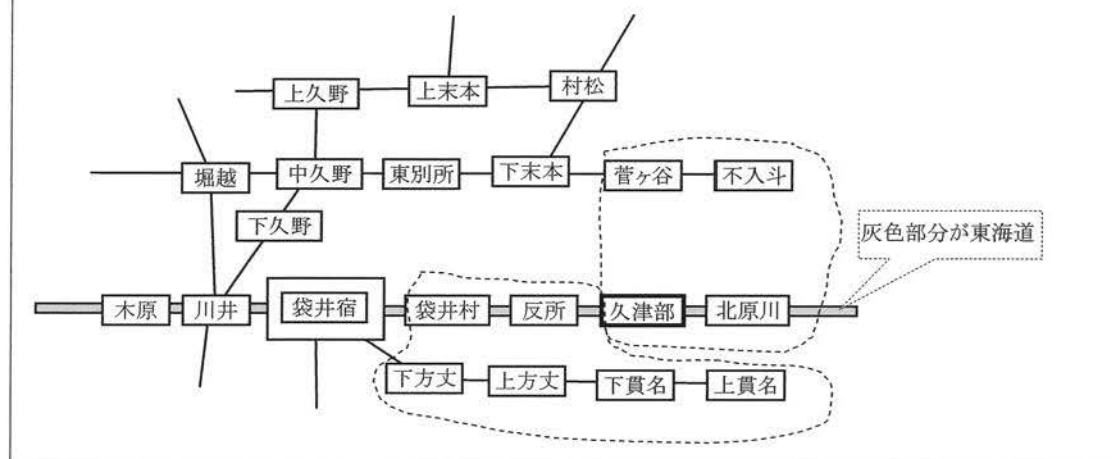


図2 明治22年の略地図



る。久津部学校成立時の学区の範囲が具体的にどこであったかについては、筆者は特定できていない。もしそれが、後の国本村、広岡村の2か村となる地域とは別であったとしたら、この書き換え文も正しくはない。しかし現状では、この書き換え文が間違っていることを示す材料もない。そのため一応、本研究では、久津部学校の対象地域は明治8年に国本村、広岡村となる久津部村他の合計9つの村であったという仮定の上で論を進めていく。

ところで、少しだけ脇道にそれるが、関係するこれらの村々について補足しておきたいことがある。実は困ったことに、広岡村、国本村が出来る前、すなわち用行義塾や久津部学校が存在した明治初期の当該地域の村の境界がよく分からないのである。この点に関して『袋井市

史』では通史編にも史料編にも何も記録がない。唯一参考になるのは、幕末の頃と推定される、袋井宿を助けた周辺の村々(助郷村)を表した絵図である。『目でみる袋井市史』の口絵には原物のカラー写真が<sup>(5)</sup>、また『袋井市史・通史編』(以下『市史』)にはそれを修正した図版が掲載されている<sup>(6)</sup>。それを簡略化し、必要な部分だけを示すと図1のようになる。破線部分は、後の国本村と広岡村に入る村を筆者がグループ化して示したもので、村の境界線ではない。また久津部のみ太枠で強調した。

これを見ると、明治8年に広岡村に統合された上貫名村・下貫名村・方丈村・反所村・袋井村、また国本村に統合された久津部村・北原川村・不入斗村・菅ヶ谷村のおおよその位置が分かる。

さらに明治22年の当該地域の地図を示すと図2のようになる。のちに久努村の一部となった国本村、広岡村の境界はこれで分かる。但し、それより前の旧村境を示す地図は発見できていない。従って久津部村の村境も未だに分かっていない。

なお、久津部学校よりも後の話になるが、後身の刮目尋常小学校は、最大で、図2に見える旧村の国本村、広岡村、愛野村、高尾村、豊沢村の5つを設置区域とした時期がある。表1の年表で、明治19年2月1日の行に記されている通りである。分校を幾つか設置した上でのことではあるが、今から考えても広範な範囲を1校でカバーしていたことが分かる。

用行義塾については「書類ノ徴スベキモノナク其設置区域不明ナリ」と、『沿革史 第二編』「第一章」「第一節」(情報No.2-3)<sup>(7)</sup>にある。用行義塾は、後の学校のように範囲を設定することをしていなかったもので、希望があれば誰でも受け入れていたようである。その結果、久津部村だけでなく近隣の袋井村や、現在の掛川市の一部になる垂木からも、さらには現在の森町北部に位置する西俣、三倉という遠方からも塾生があり、寄宿生として学んでいたことが分かっている<sup>(8)</sup>。

## (2-2) 明治7年久津部学校の対象範囲(学区)について

第2は、明治7年の久津部学校の対象範囲についてである。戸倉新資料①<sup>(9)</sup>に、明治7年4月に各村が分裂し、後に国本村、広岡村、高尾村(高田村と赤尾村が合併)となる村々の「連合公立学校」になったという記録がある。明治7年の村の分裂が何を意味するかについては筆者は把握できていないが、戸倉新資料の記述から何らかの改変があったことは事実のようである。但し国本村他が成立するのは、上述の通り明治8年以降と分かっているため、明治7年においては江戸時代以来の旧村名のま

までの何らかの変化を意味するはずである。この記録では、村そのものの分裂再編があったのか、学区の対象範囲が再編されたことを指すのか定かではないが、それでも、明治6年の久津部学校の地域が後に国本村、広岡村となる9村を対象としていたのに対し、明治7年には高尾村がそれに加わり、範囲が拡大したことが分かる。また、複数の村による「連合」の学校という名称が、既にこの時から使用されていることも分かる。

しかしながら袋井東小学校の年表には、これらについて何も記載がない。戸倉新資料を知らないままに書かれた年表であれば記載がないのは致し方ないことではあるが、今日においては果たしていかがなものであろうか。

## (2-3) 久津部学校に関する複数の異名について

第3は、久津部学校の名称についてである。同校に関する異名が複数存在することが判明した。ホームページの年表では、用行義塾は久津部学校に変わったと明記されている。『市史』も同じ理解である。『沿革史 第二編』「第二章」「第一節」(情報No.2-4)でも「用行義塾ヲ廃シ」「公立久津部学校ヲ設置ス」と記されていた<sup>(10)</sup>。その他の文書でも、例えば写真1<sup>(11)</sup>のように「久津部学校」と自署するものが残されている。後掲の写真4も、例の1つである。従って間違いなく「久津部学校」は存在した。

ところが筆者の調査で、「教員出席簿 明治十二年六月」のタイトルが付けられた別の資料(写真2)<sup>(12)</sup>を見つけた。この資料の表紙と裏表紙の左下に学校印が押されているが、そこには明らかに「久津部小学校之印」と記されている。印章であるだけに篆刻のミスは考えられないし、また略称や通称を印にすることも思えない。「久津部学校」の名は、開学当初はそれで正しいとしたら、明治12年の資料(写真2)が作られるまでのある時期に「久津部小学校」に改名したことになるのであろうか。

更にまた、上のいずれでもなく、単に「久津部校」と記された資料も見つかった。写真3に示した「日誌 明治十二年一月二月中 久津部校」がそれである<sup>(13)</sup>。不思議なことに、この資料には「久津部小学校之印」が押されている。

以上の如く、旧来知られていた久津部学校には、久津部小学校、久津部校の別名があることが判明した。しかし、これらの校名の違いをどのように理解したらよいのかが分

写真1 「久津部学校」と自署している文書(袋井東小学校蔵)



写真2 「久津部小学校之印」が捺印されている資料(袋井東小学校蔵)

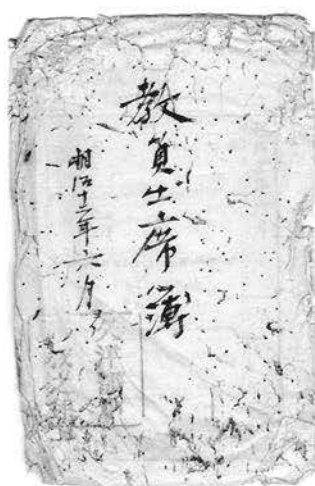


写真3 「久津部校」と記された資料(「久津部小学校之印」の捺印もある)(袋井東小学校蔵)





からない。

もちろん便宜的に別名や略称を用いることはあってよい。しかし印は公的なもののはずであるから、正式名称以外を用いるとは考え難い。それが「久津部小学校」なのである。ならば久津部学校は正式名ではないのであろうか。或は、途中で名称変更があったのであろうか。この謎の解明のためには、今後さらに調査が必要と思われる。ここでは異名があることの指摘だけに留めておく。

#### (2-4) 公立小学刮目舎の対象範囲(学区)について

第4は、公立小学刮目舎が対象とした範囲に関する問題である。ホームページの年表では、明治12年に公立小学刮目舎に改名したことを記したあとは、明治19年に尋常小学刮目舎となり、5か村がその範囲であることを伝える情報に移行している。明治6年時点の久津部学校は、後に広岡村・国本村になる村々が対象範囲であったが、翌7年には高尾村が加わって範囲が拡大したことは前述した。さらに明治19年に広岡村以下計5か村に拡大したことも袋井東小学校の年表に記されている通りである。

しかし、明治7年から19年の間にも対象範囲の変更があったのだが、そのことについては年表には何も記されていない。この間の変更を承知していないのではないかと想像する。

事実は、明治12年に公立小学刮目舎に名称が変わった時に、それ以前の対象範囲に加えて愛野村が追加され、3か村が対象範囲になっているのである。そのことは、『沿革誌 明治25～29年』に、明治「十二年九月教育令四十七ヶ条ノ頒布ニ基キ静岡県甲第二百八号達ニヨリ愛野広岡国本ノ三村聯合シテ公立小学校刮目舎ト改メタリ」と記されている(情報No.13-1)<sup>(14)</sup>ことから明らかである。また戸倉新資料からも、明治13～14年当時の刮目舎が上の3か村の連合小学校であったことが分かっている<sup>(15)</sup>。

注意を要するのは、明治12年以前の対象範囲は広岡村・国本村・高尾村の3村が対象範囲であったが、明治12年では広岡村・国本村・愛野村の3村になっている点である。高尾村と愛野村が入れ替わっているのである。

この点について、戸倉新資料では、愛野村が加わったのは、それまで対

象範囲に入っていた高尾村が分離することと引き替えて生じたとされているので<sup>(16)</sup>、その通り理解すればよいと考える。

但し戸倉新資料では、高尾村と愛野村の入れ替え時期については明治12年11月で、「公立小学刮目舎」の改称は明治12年12月からと記されている<sup>(17)</sup>。『沿革誌 明治25～29年』が記している明治12年9月という時期と微妙にズレがある。もしかすると9月は教育令の頒布の時期で、3村連合による校名改称はその後であったのかもしれない。そう考えると、戸倉新資料の記録とも整合性がとれる。だが、本当にそうであるかどうかを確認する材料がない。

いずれにしても両資料から、明治12年からは、広岡村・国本村・愛野村の3か村が学校の対象範囲になったことは間違いない。それ以前とは変化した訳なので、年表に記してもよい事柄であると思うが、いかがであろうか。

ちなみに、各種資料がこの時の刮目舎について村々の「連合」による小学校という表現を用いているが、この表現は、それよりも前の久津部学校の時代から存在していたことは既に述べた。

加えて今回の調査で、写真4に示す通り、明治12年5月16日の郡長宛文書<sup>(18)</sup>で、「第百拾貳番百拾八番百拾九番 公立聯合小学 山名郡国本村設置 久津部学校」という表現があることを見つけた。この文書でいう連合は、実質的には村の連合ということにはなるが、正確には112番、118番、119番の3つの学区の連合という意味である。この番号は「小学区」を表すもので、明治5年の「学制」によって設定された大中小の学区の1つである。当時、久津部村は、第2大学区(愛知県が本部、久津部が含まれる浜松県もこれに属す)のうち遠州国の第2中学区に属していた。この第2中学区には第1番から第210番までの小学区があり、そのうち112番は山名郡高部村が、118番は山名郡反所村・上貫名村・下貫名村・下貫名村新組が、119番は山名郡北原川村・不入斗村・久津部村が該当する<sup>(19)</sup>。

112番の高部村だけが、後に国本村、広岡村に入る村とは異なっている。高部村は明治6年に赤尾村と合併して高尾村となるが、高尾村がこの学校と関わるのは既述の通り、明治7年4月からである。戸倉新資料に書かれていた通り、高尾村が久津部学校の対象範囲に入っていたことが、写真4の資料からも裏付けられたことになる。

年表の話に戻る。ホームページの年表では明治12年にスタートした公立小学刮目舎について、同校が対象とした区域の記載がないが、その前後の学校には区域の記載をしているので、ここでも記した方が適切ではないかと思われる。もし記すなら、「(広岡村、国本村、愛野村の3ヶ村)」の文字を校名のあとに挿入すればよいであろう。ただし、愛野村が範囲に加わった時期(または刮目舎に改名した時期)は、9月と11月の2説があり、その差異

写真4 右端に「公立聯合小学」と記された久津部学校の文書(袋井東小学校蔵)





の理由は解明できていないので注意を要する。

### (2-5) 明治14年の移転新築について

第5に、明治12年から19年の間の出来事として、明治14年に校舎が移転新築されている事実がホームページの年表には記されていない。校舎の移転新築があったことは戸倉新資料と出会って筆者は初めて知り、その後の『沿革誌』の調査で更に詳細が多少分かるようになった。学校の歴史にとって大きな出来事ではないという判断であれば年表に記載がなくても問題ではないが、現在の袋井東小学校がある場所とほぼ同じ場所に移転したのがこの時である<sup>(20)</sup>というから、記載があってもよいかと思う。

それまでは用行義塾発足以来の場所で、用行義塾の校舎を利用して、久津部学校も刮目舎も運用されていたが、校舎が手狭であったために<sup>(21)</sup>、別の場所に移転新築することになったのが明治14年である。

また、この時に学校の場所が旧来の「国本村久津部字新屋 2080 番地の 1」から、「広岡村久津部 79 番地」<sup>(22)</sup>または「広岡村久津部檜ノ木」<sup>(23)</sup>に変更されている。学校が置かれた村が国本村から広岡村に変わっている。それも併せて考えると、ホームページの年表に記載する価値は十分にあると思う。

以下は補足の情報である。この時の移転で学校が置かれた村は国本村から広岡村に変わったが、大字に相当する地名は共に「久津部」のままである。不思議であるが、なぜそのようになっているのかが分からない。各資料の記述がすべて正しいとすれば、国本村にも広岡村にも久津部があったことになる。既述の通り、明治8年に久津部村は国本村に入ったことになっているのだが、厳密には、久津部村は分裂して、一部が広岡村に入ったということなのだろうか。或は分裂はしていないが、広岡村にも同じ地名が残されたということなのだろうか。

今日でも、旧東海道のあたる道路を基準として（厳密

には部分的に例外もあるが）広岡と国本に地区の呼び名が分かれている。明治の広岡村と国本村の境界線も同じように旧東海道の区切られていた。図2の地図にある旧村境を見て頂ければ、旧東海道の位置が分かる地元の方には分かって頂けるであろう。そして今日も、用行義塾の跡地に立つ説明板は旧東海道のわずかに北側にあたる国本地区に置かれており<sup>(24)</sup>、現在の袋井東小学校は旧東海道の南側にあたる広岡地区にある。両者の位置の差は僅かの南北の差でしかない。共に近接しているので、地名として同じ久津部の地名が2つの村に残されたとしても不思議ではない。但し、この地名の謎に関しては正確な事情が分からない。

### (2-6) 明治19年尋常小学刮目舎の名称について

第6に、明治19年に「尋常小学刮目舎」が設置されたときの名称についてである。ホームページの年表に記載されている校名が間違っている可能性が出てきた。

前出の『沿革誌 明治25～29年』（情報No.13-1）に、明治「十九年二月静岡県甲第十二号ヲ以テ一行政区画一学区一小学校ノ制ヲ敷カレタルニヨリ刮目舎ヲ以テ公立小学刮目尋常小学校トシ豊沢、高尾ノ両所ヘ分校ヲ置キタリ」という記述がある<sup>(25)</sup>。ここでは新しい校名は「公立小学刮目尋常小学校」と記されており、「尋常小学刮目舎」ではない。しかし、『静岡県磐田郡誌・上巻』ではホームページの年表と同じで「尋常小学刮目舎」となっている<sup>(26)</sup>。

異なる名称が出てくるということは、いずれかの資料が間違っていることになる。もとより『沿革史』の記録が完璧であるとは言わない。しかし、『沿革史』は明治26年以降に編纂が始まったものであり<sup>(27)</sup>、『静岡県磐田郡誌・上巻』や現ホームページよりも古い。より当時に近い資料であるから記憶間違い等の可能性は低いはずである。その意味で筆者は、『沿革史』にある「刮目尋常小学校」を支持するが、いかがであろうか。

だが、しかし、別の資料では写真5<sup>(28)</sup>のように、明治19年において「村立小学 刮目舎」と記すものがある。ここには「尋常」の言葉もない。また、写真6<sup>(29)</sup>のように、明治20年7月の時点で、それまで「刮目舎」と称していたものを今後は「刮目尋常小学校」と改めるよう求めた文書もある。写真6の資料が正しければ、明治20年7月までの名称は単に「刮目舎」であり、それ以降は「刮目尋常小学校」になったことになる。ここに出てくる2つの校名は、いずれもホームページの年表にある「尋常小学刮目舎」ではない。

この頃、重要なのは「刮目舎」の名称であって、「尋常小学」の文字がどこに付くか、或は付かないかは、現場では瑣末なことに過ぎなかったように思われる。それゆえ、何種類もの名称が併用されていたのかもしれない。しかしながら、正式の校名は1つだけのはずである。正

写真5 表紙に「村立小学刮目舎」と記載がある資料（袋井東小学校蔵）



写真6 「洗心館」の文字が記された文書（袋井東小学校蔵）





式名称がどれであるのか、資料により異なる記述があるのは大問題である。なぜ、そのようになっているのかについては解明できていない。それゆえ、ホームページの年表に記載されている情報は是非書き換えるべきである、とも言い難い。結局は典拠とする資料を何にするかによって名称が変わってしまうことになる。すると、どの資料を信頼するべきかという問題になるが、その答えを示せないのが残念である。ただ、ホームページで自ら「尋常小学刮目舎」と記す以上は、その根拠を問われた時に答えられるだけの用意が学校側には必要であろう。ここでは、そのような校名の問題があるという指摘をすることだけに留めておきたい。

### (2-7) 明治 19 年の分校について

第 7 に、上記の明治 19 年の校名改訂時に同時に設置された分校に関する問題である。豊沢と高尾に分校が作られたことはホームページの年表に記されているが、『静岡県磐田郡誌・上巻』には、もう 1 つ、愛野村にも分校が作られたことが記録されている。同書ではまた、愛野の分校は愛野分校、豊沢の分校は豊沢分校であるが、高尾の分校は「洗心館」とであると記されていた<sup>(30)</sup>。洗心館の名称は、筆者はこの書籍で初めて目にしたが、のちに袋井東小学校に残る文書束の中から「洗心館」の文字が記された文書（前出の写真 6）を見つけ、間違いのない事実であることを確認した。

問題は、愛野分校があったとする『静岡県磐田郡誌・上巻』の記述をどのように扱ったらよいかということである。この点に関しては、先の『沿革誌 明治 25～29 年』（情報 No.13-1）の記述<sup>(31)</sup>でもホームページの年表と同じで、豊沢と高尾（但し洗心館の文字はない）の 2 つに分校が作られたとだけ記されていて、愛野の分校には言及がない。なぜなのであろうか。これに関しては、他に手掛かりとなるような情報を見つけれられていないので、残念ながら謎のまま膠着状態にある。

### (2-8) 明治 22 年の刮目尋常小学校の分校について

第 8 に、明治 22 年に久努村が成立したことを受けて、新しく久努村としての「刮目尋常小学校」が設置された事実は、ホームページの年表に記載されている通りである。しかし、以下の分校に関しては年表に記載がない。

『静岡県磐田郡誌・上巻』には、この時、村松に村松分校が 1 年間ほど置かれていたという記載がある。また、愛野、豊沢、高尾は久努村に入らず別の行政区域になったので、これらに置かれた分校は分離したことも同書に記されている<sup>(32)</sup>。以上の分校の再編は、村の再編と直結して行われたことが分かる。

分校のことは小さなことなので、年表に書くまでもないという判断であれば、その判断でもよいと思う。しかしながら事実を知った上で書かないと判断したのと、知

らないままで未記入になっているのでは意味が異なる。後者の可能性もあるかもしれないことを考慮して、そのような事実があったらしいことを情報提供する意味で、ここに記しておきたい。

### (2-9) 明治 26 年の「村立」について

第 9 に、久努村立と「村立」を名乗るようになったのは、ホームページの年表では明治 26 年からとなっているが、これは間違いであることが判明した。

また、ホームページでは、この時に村立の学校に改称されたことと高等科 2 年を設置したことを並置して記しているが、この 2 つには何の関連性もない。明治 26 年に高等科を設置したことで、尋常「高等」小学校に変わったということは正しいが、「村立」を名乗るようになったのは高等科設置の 1 年前からである。それなのに、明治 26 年の高等科設置の箇所「村立」の文字が唐突に登場するのは奇異である。なお、高等科設置の件は後述する。

村立化の理由は、『沿革誌』を調査したことで初めて分かった。前出の『沿革誌 明治 25～29 年』の記録（情報 No.13-1）に、明治「廿三年十月六日勅令第二百十五号ヲ以テ小学校令ヲ公布セラレ同廿五年一月四日県令第一号ヲ守【「守」は原資料のまま…小栗注】テ同年五月一日新ニ久努村立刮目尋常小学校ヲ設置セリ」とあるのが、その根拠となる記述である<sup>(33)</sup>。村立化は上からの命令によることが、ここから分かる。また、この時、村立の文字が冠に付くようになっても尋常小学校のままであり、高等小学校にはなっていない点を見落としてはならない。

久努「村立」と称するようになったのは明治 23 年の小学校令のためである。同令の第 2 条 2 項に「市町村若クハ町村学校組合又ハ其区ノ負担ヲ以テ設置スルモノヲ市町村立小学校トシ」という条文が入り、「市町村立小学校」の定義付けがなされた<sup>(34)</sup>。これ以外の小学校はすべて「私立小学校」となり、公立学校はこれ以後すべてが市町村立小学校と呼ばれることになった。久努村立と称されるようになったのもこれに依るのであって、高等科の設置とは無関係である。

また、村立の名に変わった時期は、上記『沿革誌』の記述にあるように明治 25 年 5 月 1 日であり、ホームページの年表にある明治 26 年 10 月 30 日ではない。

以上のことから、「村立」の名前に変わったことと、高等科が設置されたことは、別の事実であるから、年表に記す際は別々に表示すべきである。

ちなみに、学校名の前に付された「村立」や「公立」などの呼称も、上からの指示によるものであることが今回の調査で分かった。「村立」については上述した。同様に「公立」の名称も上からの指示であった。「明治廿年九月廿二日」付で静岡県礼閣口隆吉より、従来「町村立小学校」と呼んでいたものはすべて「公立小学校」の呼称に改めるとの指示が県から出されている（写真 7）<sup>(35)</sup>。



実際に刮目尋常小学校がこの指示に従っていたことが、明治23年2月に校印を作成した際に「公立刮目尋常小学校」と彫らせていることから確認できる(前掲表1参照)。

しかし明治12年当時の刮目舎は既に「公立小学」としていた。だが、明治14年頃には「村立」連合小学を名乗ることもあったし、明治17年には「村立小学」と称していた(同じく前掲表1参照)。

それが明治20年の県の通達で「村立」を止めて「公立」の呼称にせよと指示され、さらに5年後の明治25年には「久努村立」に変わり、以降は「村立」のまま継続することになる。明治23年に「公立」と記した校印を作った時から見ると、僅か2年後に「村立」の呼び名に変わったので、「公立」の印はすぐに使えなくなったはずである。

このように明治20年台まで、小学校名の上に冠する呼称を村立にするか公立にするかという細かなことまで上から指示されていたこと、さらには、その指示さえ数年ほどで変化していた事実を知ると、当時の学校現場はさぞや閉口したであろうと想像する。以上は些細なことではあるが、参考のために記しておきたい。

## (2-10) 明治26年の高等科設置について

第10に、ホームページの年表には、明治26年に高等科の設置を受けて「尋常高等小学校」になった日付が「10月30日」とされている。ところが、前出『沿革誌 明治25～29年』(情報No.13-1)では、「明治廿六年十一月一日高等小学校ノ教科ヲ併置スルノ件許可トナル因テ愛ニ久努村立刮目<sup>尋常高等</sup>小学校トナル」とある<sup>(36)</sup>。

高等科設置による「尋常高等小学校」への改名が、10月31日と11月1日の2説あることになる。どちらが正しいのかは不明である。ここでは日付に関して疑義が残ることだけを記しておく。

以下は、関連する補足情報である。高等科設置以来、

「尋常高等小学校」という言い方をを用いることは、公的な場合でも普通になされていたので、それも間違いとは言えない。例えば、『写真集 磐田・袋井いまむかし』に収められている刮目尋常高等小学校の写真では、校門の左に「刮目尋常高等小学校」と縦書きで一行に書かれた校札が掲げられていたことを確認できる<sup>(37)</sup>。しかし、上記の通り「久努村立刮目<sup>尋常高等</sup>小学校」のように、「尋常」と「高等」を分かち書きにする表記も使われている。

事実としては、例えば、写真8の文書<sup>(38)</sup>の2～3行目に「高等並尋常小学科課程」と記されていることから分かるように、当時の小学校の課程は高等小学科と尋常小学科に分かれているだけで、「高等尋常小学科」という1つの課程があった訳ではない。

また、高等科設置以後に編纂され、高等科の記録も反映されている『沿革誌(袋井東小学校)』の記述でも、「本校設置」は明治22年であると繰り返し記されていたが、明治22年に設置されたのは久努村の「刮目尋常小学校」であり、高等科設置よりも前のことである。このことは、高等科が設置されて以降も、自分の学校が始まったのは、高等科設置前の「尋常小学校」の時であると意識されていたことを意味する<sup>(39)</sup>。この学校では確かに「高等小学校」は明治26年から始まったのであるが、そのことをもって学校がまったく別のものになったとは考えられていなかったことが、ここから分かる。

従って、高等科が加わり「尋常高等小学校」の呼称を用いるようになったとしても、当時の人々の意識の中では、「尋常・高等小学校」のように間に「・」を入れてイメージされていたと考える方が実態に近いであろう。続けて記す表記は通称と考えた方が適切である。そうでなければ、分かち書き表記が用いられることはあり得ない。

もともと、分かち書きで表記しても、しなくても、現場では大きな問題ではなかったであろう。だから両方の表記が同時に使用されて、問題視されることもなかった訳である。それゆえ、このことは特別に取り上げる程、重要な事柄ではないかもしれない。ただ、当時の人々の意識がどのようであったかは、後の時代になればなるほど忘れ去られる可能性があるため、ここに記録して保存しておきたいと考える。

## (2-11) 高等科の廃止と再設置について

第11に、これも『静岡県磐田郡誌・上巻』で判明したことであるが、刮目尋常高等小学校は明治41年3月18日に高等科(2年)が廃止されたことに伴い、「刮目尋常小学校」の名に戻り、さらに翌年、再び高等科を併置したことで、「刮目尋常高等小学校」に戻ったという事実が分かった<sup>(40)</sup>。1年間、高等科が消えた時期があったことになる。

この時の高等科の廃止は、義務教育の延長が理由であるとされているが<sup>(41)</sup>、これは当時の小学校制度全体の見

写真7 明治20年「公立小学校」の呼称に改めるとの指示文書(袋井東小学校蔵)



写真8 「高等並尋常小学科課程」の文字がある明治21年の文書(袋井東小学校蔵)





直しによって生じたものである。『学制百年史』によれば明治40年3月21日の小学校令一部改正により、尋常小学校の終業年限が4年から6年に延長され、6年間は義務教育期間とされた。また、この改正は1年間の猶予のあと翌明治41年4月から実施された<sup>(42)</sup>。

刮目尋常高等小学校の場合、旧来の高等科(2年生)が尋常小学校の課程に吸収される形になるので、校名から「高等」の名が消えたことが分かる。翌年には2年制の高等科が改めて設置されたので、再び「尋常高等小学校」に戻した訳であるが、同じ「高等科」であっても、これより後の高等科は、尋常科の期間が延長され6年間となったその上に置かれたものであり、性格が異なるので注意が必要である。

以上のことから、この学校では「尋常高等小学校」は明治末の途中で一旦、途切れていたという新事実が判明した。その経緯を知っていれば、仮に将来、この時期の記録に高等科の卒業生が1年だけ存在しないことが明らかになったとしても、理由を特定できるから混乱せずに済むであろう。

しかしながら、明治末期に義務教育の延長があったこと、及びそれに伴って高等科が1年間消えていたことはホームページの年表ではまったく触れられていない。記載があってもよいことかもしれない。

### 3. まとめ

以上、本稿では、現在の袋井東小学校のホームページに「沿革」として掲載されている同校の年表に関して、修正を要すると思われる部分、または疑義が残る事柄を指摘した。今後、同校がホームページを見直す際に、何らかの参考となれば幸いである。

なお考察にあたっては袋井東小学校から借用した未公開文書を多数利用させて頂いた。末尾にそのことを記し、関係各位に感謝の意を表する次第である。

(1) 表1の見方に関する注意で本文中に示せなかったものを以下に記す。

・「学校名等」と「備考」欄を結合して記している部分は全て袋井東小学校の年表に記載されている情報を示す。「学校名等」の欄と分離して「備考」欄を置いている部分の記述はすべて小栗による記述。

・備考欄等で〔 〕を付けて記した略記号は出典を表す。但し、表中に具体的な出典を記した場合は略記号を用いていない。略記号の意味は以下の通り。

〔\*〕=『沿革誌 明治25～29年』より(『沿革誌』の資料名については、本誌本巻別掲拙稿「用行義塾に関する未公開資料「沿革誌」について(その1)」を参照のこと)

〔★〕=戸倉新資料より(拙稿「用行義塾と戸倉新資料の

こと」〔『静岡理工科大学紀要』第23巻、2015年6月1日、所収)を参照のこと)

〔○〕=『沿革誌 第二編』の(情報No.2-1)より(本誌本巻別掲拙稿「用行義塾に関する未公開資料「沿革誌」について(その2)」を参照のこと。)

〔◎〕=『沿革誌 第二編』の(情報No.2-2)より(同上)

〔▲〕=『静岡県磐田郡誌・上巻』(下の注(2)参照)348～349頁より

〔△〕=袋井東小学校から借用した文書束のうち、「学校新口【1字不明】築費支出予算細目」(明治13年9月)から始まる文書束の中にあつた「賞与取調簿」(明治17年1月)より【「写真9」を参照のこと】

〔角川〕=『角川日本地名大辞典 22 静岡県』(昭和57年10月8日、角川書店)より

(2) 磐田郡教育会編『静岡県磐田郡誌・上巻』(昭和46年3月24日、名著出版、但し大正11年発行の復刻版)97頁。

(3) 前掲『角川日本地名大辞典 22 静岡県』382～383頁に国本村、824頁に広岡村の記述がある。

(4) 『沿革誌』の資料名については、本誌本巻別掲拙稿「用行義塾に関する未公開資料「沿革誌」について(その1)」を参照のこと。

(5) 『目でみる袋井市史』(昭和61年3月31日、袋井市史編集委員会編集、袋井市役所発行)口絵8頁。

(6) 『袋井市史・通史編』(昭和58年11月3日、袋井市史編集委員会編集、袋井市役所発行)633頁。

(7) 本誌本巻別掲拙稿「用行義塾に関する未公開資料「沿革誌」について(その2)」を参照。なお「情報No.」はすべて、同稿に掲載している表4・表5で用いたもので、『沿革誌』中の情報内容とその収録場所を示している。以下の「情報No.」も全て同じである。

(8) 拙稿「用行義塾の基礎的研究資料(その1)」(『静岡理工科大学紀要』第22巻、2014年6月1日、所収)、同「用行義塾の基礎的研究資料(その2)」、同「用行義塾の基礎的研究資料(その3)」(以上は共に『静岡理工科大学紀要』第23巻、2015年6月1日、所収)に収録したデータから分かる。これら塾生の実態については別の機会にまとめて発表する予定である。

(9) 戸倉新資料に関しては、すべて注(1)に示した拙稿「用行義塾と戸倉新資料のこと」を参照のこと。

(10) 注(7)に同じ。

(11) 筆者は2015年3月に袋井東小学校から幾つかの文書束を借用し、2016年1月現在も未だ調査の途中にある。本稿で「文書束」「文書の束」という時は、すべてこの時に借用した資料を指すことを、まず断っておく。文書束のうち、「郡役所達」から始まる文書束の中に含まれている「学校ノ書類」の中に、明治7年11月、明治9年4月の頃のもので「第二大区拾一小区百拾九番小学 久津部学校」と自署された文書を既に幾つか見てい

写真9 村立小学刮目舎の名がある明治17年の資料





る。写真1はそのうちの明治9年4月のもので、林浜松県令に対して、廃社となった北原川村の山王社の境内にある木立を学校の教員用居宅建設のために払い下げよう要請した「願」の一部である。

(12) この資料は「静岡師範学校教則」から始まる文書束の中にあつたものである。

(13) この資料は、虫食いの激しい「学校新口築費支出予算細目 明治十三年九月」(□の一字は不明)と題された文書から始まる文書束の中にあつたものである。

(14) 注(7)に同じ。

(15) 前掲拙稿「用行義塾と戸倉新資料のこと」参照。

(16) 同上。

(17) 同上。

(18) この文書は、「明治十六年一月ヨリ十七年十二月 郡役所達 村立小学刮目舎」から始まる文書束の中にある、「学校ノ書類 山名郡国本村」の文書綴りの中にある。

(19) 以上、前掲『静岡県磐田郡誌・上巻』295～310頁。

(20) 『袋井東小学校のあゆみ』(袋井東地区文教施設後援会、昭和62年3月31日)に、この時の移転先「久津部松の木」は「現在の校地を含めて妙日寺西側付近一帯の田畑を総称する地名」で、「現在学校のある所」と記されている(11～12頁)。しかし、その番地は「広岡村久津部79番地」(前掲表1の年表で明治14年10月4日の行を参照)であり、明治22年に久努村が刮目尋常小学校を設置した時の番地「広岡90」(同表の明治22年11月29日の行を参照)と住所表示が異なっている。「久津部79番地」と「広岡90」が同じものを指すのであれば、明治14年の移転で、完全に現在と同じ場所に移ったと言えるが、異なる場合は、まったく同じ場所とは言えないかもしれない。いずれも、ほぼ現在の東小学校がある辺りであることは間違いなさそうであるが、微妙な記録の違いがあることを断っておく。

なお、『袋井東小学校のあゆみ』のタイトルであるが、表紙には『竣工記念 袋井東小学校のあゆみ 62.3.31 袋井東地区文教施設後援会』と文字が並んでいるが、奥付には『袋井東小学校のあゆみ(竣工記念)』と記されている。表題に「竣工記念」を入れるべきか否か、入れるとしたら前か後かを迷うケースである。筆者の研究では「竣工記念」の文字を除いて『袋井東小学校のあゆみ』の表記で統一した。

(21) このことは、『沿革誌 明治25～29年』で初めて判明した。情報No.13-1がそれである。注(7)を参照のこと。

(22) 『沿革誌 第二編』の情報No.2-1。注(7)を参照のこと。

(23) 同上、情報No.2-2。

(24) 本誌本巻別掲拙稿「用行義塾の場所と建物について」を参照のこと。

(25) 注(7)に同じ。

(26) 前掲同書、348頁。

(27) 本誌本巻別掲拙稿「用行義塾に関する未公開資料「沿革誌」について(その1)」を参照。

(28) この資料も、注(13)で示した文書束の中にある。

(29) この文書は、注(11)で示した「郡役所達 戸長役場 達類 刮目舎」に綴られていたもので、今から校名を各「分校」に改称せよという通達の一部である。山名郡外四ヶ村 戸長役場から刮目舎、洗心館、豊沢学校の教員に宛てられたもので、日付は「明治二十年七月八日」となっている。役場からの改称指示は以下の通り。「刮目舎」→「刮目尋常小学校」、「洗心館」→「刮目尋常小学校高尾分校」、「豊

沢学校」→「刮目尋常小学校豊沢分校」。

(30) 以上、前掲同書、348～349頁。

(31) 注(7)に同じ。

(32) 前掲同書349頁に「久努村刮目尋常小学校と改め村松に村松分校(一ヶ年にして廃止す)を置けり」とある。分離した分校のことも、同頁にあり。

(33) 注(7)に同じ。

(34) 前掲『静岡県磐田郡誌・上巻』318～319頁で、明治19年の小学校令と、明治23年の小学校令を対比して見ることができる。

(35) この文書は、注(29)の「明治十六年 郡役所 戸長役場 達類 刮目舎」の中にあつたもので、「県令第八拾二号」のことである。

(36) 注(7)に同じ。

(37) 鈴木直之監修『写真集 磐田・袋井いまむかし』(1988年10月14日、静岡郷土出版社)151頁。

(38) この文書は、「学校新口築費支出予算細目(明治十三年九月)」から始まる文書束(注(13)に同じ)の中に含まれていた「明治十九年 達令綴込 村立小学刮目舎」の中にあつたもので、「県令第四号」(明治21年2月8日)のことである。

(39) この点については、前掲拙稿「用行義塾に関する未公開資料「沿革誌」について(その1)」で論じているので、それを参照のこと。

(40) 前掲同書、349頁。

(41) 同上。

(42) 『学制百年史』(文部省、昭和47年10月1日発行)321～322頁。またこの時、尋常小学課程の上に置く高等科については終業期間を2年とし、必要に応じて3年に延長できるとされた。刮目尋常小学校は新しい高等科を設置するにあたり再び2年制を選択したことが分かる。